

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2570200374		
法人名	社会福祉法人 大樹会		
事業所名	グループホーム和楽		
所在地	滋賀県彦根市野田山町1099-1		
自己評価作成日	平成23年6月11日	評価結果市町村受理日	平成23年7月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2570200374&SCD=320&PCD=25
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク滋賀福祉調査センター		
所在地	大津市和邇中浜432番地 平和堂和邇店2階		
訪問調査日	平成23年7月14日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

生活の中で、共に過ごす時間を大切に一緒に活動や作業を行うことで、生活をサポートしている。
 保育園が隣接しているため、世代間交流を通して、生活の活性化を図っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

運営法人の基本理念は水平対等、双方向、地域共生と謳い、開設して9年目を迎える事業所として地域の中での暮らしの支援等、五つの『特徴と想い』に展開し全職員が利用者一人ひとりの想いに寄り添いケアをしている。自治会に加入し、地域のサロンにも参加交流するとともに外食、見学、旅行等年間30余回の外出支援に力を注いでいる。広い中庭は花壇、菜園、鶏舎、更に沼風に池を設え、アヒルが遊び、周囲には四季の果樹を配し、利用者にとって果実の収穫等、寛ぐ場になっている。清潔な居室や仏壇を備えた居間、一人の居場所コーナー等を設けている。住宅街の一角の同じ敷地内に乳幼児保育園とサービスが併存しており、居間や居室からは保育園の芝を張り詰めた園庭につながり、園児達の元気な姿を眺め利用者は毎日を楽しんでいる。安心して穏やかに毎日が過ぎていく事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念に掲げ、年頭に理事長より挨拶があり、職員間の共有を図っている。また、ミーティングでも理念の再確認を行っている。地域へのいこいサロンのへの参加など、地域とのかかわりを持つ機会が、毎月ある。	法人の基本理念を事業所として地域での付き合いや家庭的な環境を提供する支援など五つの想いと特徴に表しミーティングやカンファレンスの中で職員全員で話し合い、理念に沿った具体的なケアの共有に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	月1回地域のサロンへ出かけたりすることで、地域の方と顔馴染みとなり、買物先で出会った際、自然と挨拶を交わすようになっていく。また、2ヶ月に1回、広報を回覧板に入れている。	自治会に加入し、行事や地域の月1回の「高齢者サロン」に参加している。事業所主催の「夏まつり」には大勢の地域の参加を得ている。AEDによる救命訓練を地域に呼び掛け、交流と馴染みの関係を築いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	デイサービス・乳児保育園を併設しており、希望に合わせてサービスを利用していただけよう、取り組んでいる。保育園が、子どもの110番連絡先になっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催し、日常の報告・検討を行い、出た意見を改善につなげている。また夏祭りやお餅つきへも参加していただき、日頃のホームの様子をみていただく機会も作っている。	利用者と家族の代表、行政、地域の代表、有識者と事業所側で構成し、2ヶ月毎に会議を開いている。利用者の状況、外部評価についてや行事を報告、協議をしている。職員はや議事録で内容を共有している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	介護相談員の受け入れや、広報を見て頂いている。相談ごとがある時は、随時連絡又は訪問し、助言を得ている。	広報紙を毎月、郵送や介護福祉課には都度訪問し、運営の事や入居者の事で相談や助言を受ける等、連携を図っている。介護相談員を毎月受け入れている。包括支援センター職員も夏祭りに案内している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在、拘束や施錠は行っていない。安全上ベット柵の使用を行う場合は、家族の同意を得ている。具体的な行為を、職員全員が把握できていないため、共有する必要がある。	日中は玄関を始め、すべて施錠をしていない。身体拘束ゼロケアの研修を職員全員が受け、正しい理解の下でケアに取り組んでいる。家族には面会時やホーム便りなどで繰り返し説明し身体拘束の弊害を共有し合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	言葉かけにおいて、その方の行動を制止したり混乱させてたり、心を傷つけてしまう可能性があるため、ミーティングやケアカンファレンスにて、見直している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修で設けているが、研修で学んだことを書面の報告のみならず、口頭で職員全員に伝達し、理解できるようにしていく必要がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前や退居前に時間をとり、書面を通して口頭でも説明を行い、理解・納得を求めている。また、随時質問などにお応えして、理解に努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	うまく伝えられない方が多いため、日常の会話から要望を引き出し、反映できるよう努めている。言葉で表せない人の希望を知り反映させるのが、難しい。家族には、面会時やケアプランの説明時などに、意見を聞いている。	利用者の生活状況を個別の連絡シートに記入し毎月家族に手渡している。家族の面会頻度は多く、来訪時に職員は意見を傾聴している。意見、苦情を事業所担当者や外部機関の窓口を重要事項説明書で紹介している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	主任を通して、報告相談を行い、反映している。毎月の定例会議にても、検討課題を揚げ、検討し改善につなげている。	管理者は職員と個人面談を定期的を実施し運営に関する事等で意見、提案を聞く機会を設け会議等で協議し運営に活かしている。毎月、グループ全体でも責任者定例会議を開き、職員の意見を検討し反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	超過勤務にならないよう、時間内の申し送りにて引き継ぎに努めている。年度始めに、給与の見直し＝昇給がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修としては、法人研修とグループホーム内における勉強会を、定期的に行っている。外部研修については、職員が均等に参加し、スキルアップにつなげられる機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	彦愛犬の研修会・部会にて、講師を招いた研修会への参加、ホーム同士の意見交換会に参加している。また、月に1回、ホーム同士で交換研修を行い、日頃のお互いの悩みなどを、話す機会がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居までに訪問を行い、本人・家族・ケアマネジャーより情報を得て、職員間においては、カンファレンスを開き、情報の共有に努めている。又、入居前に見学をして頂き、生活の様子などを見て頂く事で、安心を得られるように努めている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申し込みの相談時や、入居までに訪問を行い、話し合いを行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅時のケアマネジャーとも連携を図り、適切なサービスを活用できるよう、努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中で、料理や裁縫など、教えて頂きながら、一緒に活動している。また、梅干やおせち作りなど、季節ごとの知恵も教えて頂きながら、行っている。活動が押し付けにならないよう、配慮する。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	誕生日会や夏祭り・家族会・おもちつきなど、共にホームにて過ごして頂く機会を、作っている。また、月に1回お手紙を個々に送付し、1ヶ月の様子をお伝えしている。参加して下さる家族に偏りがあるため、協力		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族に限らず、親戚や友人・近隣の知人さんたちの面会がある。また、法事や祭りなどに出かけてられている。しかし、身体機能の低下に伴い、出かける回数が、入居当初よりも、減ってきている現状がある。	利用者にとって馴染みの人々が事業所に訪問しやすい様、職員はもてなしの気持ちで対応している。墓参、馴染みの店や場所、行事見学等、関係が途切れない様、送迎支援も行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	性格や認知症の症状の違いにより、トラブルや混乱が生じることもある。気の合う者同士で活動ができる環境を整えたり、外出できる機会なども設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	移転先(病院や特養など)へ、入居者の方も一緒に、面会に出かけたりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望に添えるよう、ケアカンファレンスや申し送りにて、検討している。言葉や表情など表面に出ない思いに気づいていく必要がある。	意向の表出が困難な利用者には表情や仕草を観察し、嫌なのかどうなのかを把握し、職員同士共有している。会話の出来る人はその場で対応をし、本人の意向に添うようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式の活用や、ホーム内の勉強会において、「わだち」の様式を活用し、生活暦を知り理解していく場を設けた。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	記録に残し、朝と夕の1日1回の申し送りにて、スタッフ間で共有するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアカンファレンスを開き、ケアプランの作成につなげている。家族の希望も、プランの説明時に尋ね、承諾を得ている。 入院等で心身の変化があれば、カンファレンスを開き、随時作成し直している。	センター方式を採用しアセスメントシートを参考に計画の素案を作成し、カンファレンスで検討後プランを決定している。変化が無くても計画の見直しは3ヶ月毎に行なっている。何れも家族に承諾印を得ている。	家族の承諾記入欄に日付欄を設け承諾した日を明確にする様、望む。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録と申し送りにより、情報の共有に努めている。状態や実践を記録するだけでなく、気づきを活かせるような記録に変更していく必要もある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	心身の状態に合わせて、特養への転居などの相談を、適宜行っている。また、病院への付き添いや介護保険証の更新申請も、家族が困難なときに限り、代行している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議に、地域包括支援センターの方に参加して頂いている。年1回、併設の保育園と合同避難訓練では、消防署の協力を得ている。散髪に向くことができない時は、近所の理髪店から散髪に来てもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に本人・家族の同意を得て、ホームの協力医に変更し、月2回の往診を受け又状態に応じて、主治医と連絡を取り、報告・相談をしている。	現在、全員が家族の希望で契約医に受診している。契約医は月2回、内科と歯科の往診があり、検便、検尿、心電図の検査も年1回、定期的に行って、健康維持を支援している。結果は家族に報告をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設のデイサービスの看護師に、何かあった時は相談・対応している。しかし、グループホーム専属の看護師はいないため、主治医に相談することが多い。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、病院の相談員を通じて相談し、担当医や担当看護師・理学療法士とも話し合いを行っている。また、退院に向けてのカンファレンスを、病院とスタッフ間で行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態に応じて話し合いを行い、受け入れる際はカンファレンスを行い、支援できる限界を家族に説明し、同意書を交わしている。又主治医にも相談し、助言を得ている。特養への申し込みの希望があれば、適宜家族・特養との相談員と相談している。	終末期対応指針書を策定し、急変時における確認書と共に、家族と同意書を交わし利用契約を締結している。重度化への進行状態に応じ適宜関係者で協議している。事業所として職員は終末期ケア研修を受講している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応について、マニュアルを作成し、全ての職員は研修を受けているが、実際急変が起こった時に、冷静に適切に対応できるかが、不安である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を年2回行い、内1回は消防署の協力を得て、指導を受けている。また、夜間を想定した避難訓練も行っている。	夜間を想定した避難訓練を含み消防署の指導を受け、年2回実施している。、AEDに依る救命訓練を地域にも呼びかけ実施している。訓練には地域の参加が未だ実現していない。	運営推進会議等で呼び掛け、先ず避難訓練に運営推進会議のメンバーから参加して貰い、地域の参加に繋がれる様、希望する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人を尊重することに心がけているが、入居期間が長くなるにつれ、馴染みの関係ができる一方で慣れが生じ、尊厳に欠けた言葉使いになってしまうことがあるため、配慮している。	人権、プライバシー、個人情報の取り扱い等の研修を全員が受講し、扱いを職員は共有している。馴染みと狎れ合いについて常にミーティングで戒め合っている。個人情報書類の管理はロッカーで管理している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	衣類や献立やおやつ、外出先など、日常生活の中で、入居者自身が選べる場面を多く持つようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフが一つの場所に偏ることのないよう、各場所(台所・リビング・等)にそれぞれ配置し、その場で過ごす方たちと、一緒に過ごせるようにしている。また、希望に合わせて、個別の外出などを取り入れている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出時など、お化粧品やアクセサリなどもできるように支援している。また、一緒に買物に出かけ、洋服や帽子等を購入したり、散髪に出かけたりしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎食入居者の方と一緒に、作り方を教えて頂きながら行っている。食材の買出しも、定期的と一緒に出かけ、買出ししている。片付けはそれを役割とさせて頂いている方がおられ、その方たちと一緒にしている。	利用者は能力に応じて出来る事を分担し食事の準備、調理、後片付け等をしている。職員は利用者と一緒に食事をしている。ほぼ毎月の割合で外食をし、誕生会やクリスマス等季節の行事食を楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	糖尿や腎機能の悪い方に対しては、食事量や味付けに配慮している。又必要に応じて、法人内の栄養士に相談し、助言を得ている。水分に関しては、毎食時に限らず、活動や作業の合間の休憩時にもお茶等を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時と就寝時には、必要に応じて声かけ・介助を行っている。自立されている方に関しては、どこまでできているかが把握できていない時もある。月2回の歯科往診を受け、歯科医の指示を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	失禁される方が増えたが、日中は介助にてトイレに座って頂いたり、排泄状態をチェックし、トイレの間隔をみながら声かけ・誘導を行ったりとしている。	日々の生活観測から個々の排泄をチェック表に記載し排泄パターンを把握、共有している。職員は利用者の様子から察知し自尊心に配慮してトイレでの排泄に誘導している。布パンツの使用を日中は心掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品や食物繊維を多く含む食材を、献立に取り入れるなどの工夫をしている。また、朝のラジオ体操や、隣接の保育園への散歩など、適度な運動を一緒に行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	時間帯の要望はないが、1名を除き、午後からと職員の都合になってしまっている。毎日入浴剤を変更したり、季節に合わせてゆず湯や菖蒲湯などを行い、ゆっくり入っていたりするように、心がけている。	2日に一度の割合で午後希望に沿って対応しているが毎朝入浴を希望する利用者にも対応している。季節の柚子湯を楽しんでいる。入浴を拒む利用者には時間や職員を代えたり、声掛けの工夫をして入浴を勧めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調や睡眠状態に合わせて、休んで頂けるように、配慮している。また、昼夜逆転にならないよう、日中の生活リズムにも配慮し、活動を共にしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	状態や症状の変化に伴い、月2回の往診時に、内服の相談もしている。変更になった薬に関する副作用の把握にかけていることがあるため、周知していく。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事においても、料理や洗濯たみ・掃除・裁縫など、個々の得意とする役割をそれぞれに持っていただき、共に行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	身体的レベルの低下などに伴い、行き先が制限されてきたが、その方の希望と状態に合わせて、買物や外食など、個々に外出できる機会を設けている。また、天気の良い日は、中庭に出て日光浴をしたり、隣接の保育園に向いて子どもたちと交流する機会を設けている。	季節の花見、神社仏閣に参詣、地域サロンへ参加、買い物や外食等、外出の頻度は年間32回と多い。隣棟の保育園へ出向き子どもたちとの交流や園庭、中庭の散策や、花壇の掃除、菜園の手入れ等、日常的に外へ出る機会を増やしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	少額を自己管理されている方もおり、買物時は自分で支払いをされている時は、見守りを行っている。また、お小遣いをお預かりし、買いたいものをいつでも購入できるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望に添って、電話をかけたりお手紙(年賀状など)を書いたりなどできるよう、支援している。自由に、電話をかけられるようにしている。家族や知人からの電話にも、すぐつなげられるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	中庭の花を一緒に採って飾ったり、季節を感じてもらえる飾りを、壁やテーブルにいたり、照明の明るすぎる廊下には和紙を貼ったりとして、落ち着きある空間の工夫に努めている。	共有空間のスペースは十分広く、一人で居たい人の為にのれんで仕切った空間スペースを作っている。居間には仏壇を備え、朝夕に利用者がお経を唱えている。電燈の明るさを和紙で囲い柔らかい雰囲気を出している。風呂、トイレ、厨房等清潔を保っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングとダイニングにて過ごされる方が多い。お部屋に戻られた際は、必要以上に声はかけず、お部屋でゆっくり過ごしていただくよう、見守っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使っていた家具を持ち込まれる方は少ないが、写真や使われていたのれんや壁掛け、置物など小さな物でも持ってきていただくよう、家族さんにもはたらきかけている。	利用者のスナップや家族の写真、絵等を居室に飾って居心地よく暮らせる様になっている。利用者は使い慣れたベッドや寝具、机、椅子、小物を持ち込み個々の居室らしさを醸し出している。居室は洗面台を設備している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや台所の椅子に座った際、足元が安定するよう足置きを置いたり、入浴時は補助椅子を活用したりとしている。又、トイレの場所がわかるよう、大きな字で見やすく看板を立てたり、貼紙したり工夫している。		